

取組実績の概要（2ページ以内）**1. 採択まで～不採択からのスタート～**

平成 26 年度にスタートした本事業に、本学は同年度最初のチャレンジをした。テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」とテーマⅡ「学修成果の可視化」の複合型でエントリーしたが、結果的に不採択であった。

その理由を分析する中で、プログラム委員の所見を再度本学の申請書について見直し、また採択された大学の申請書を研究し、翌年再び挑戦することとなった。

2. 再挑戦から、採択そしてこの 5 年間で振り返る

平成 27 年度に同事業が「テーマ 4 長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」で公募を行い、本学は 2 回目の挑戦を試みた。

テーマが「ギャップイヤー」と決定した際、短期大学の 2 年間という修業年限において、入学直後等に 1 か月以上の 長期の学外学修プログラムを全学的に行うことは難しいという意見があったが、他学科に先がけ国際コミュニケーション学科が先陣を切って取り組むという枠組みで新しいプログラムを作り上げた。

前年度の反省から、従来の取組を軸に、そこに新たな特色を出すことに注力した。国際コミュニケーション学科の前身である英語科では 20 年近く、インターンシップや留学の実績があった。本学しかできないプログラムにするため、4 学期制を導入し、夏休みを含めた 1 年次の 8 月～11 月に地域や海外に学生を送り出すという、本学独自のギャップイヤー（ターム）を作り上げた。

また、従来もこれまでそれぞれの学科で地域活動に取り組んできたが、長期学外学修の枠組みを通して中身を見直し、「Awesome Sasebo! Project」というネーミングのもと、学科間の連携促進し、リニューアルして取り組んだ。

5 年間の活動は試行錯誤の繰り返しであり、採択当初は特に「国際コミュニケーション学科が他学科をどう巻き込んで本事業を全学的なものとしていくか」という点において苦心した。この課題は、国際交流・地域連携推進委員会を設立し、各学科教員が参加した定例会議を重ねることで徐々に問題意識として浸透し、改善していった。

本事業を行うにあたり、地元佐世保のステークホルダーである各界の代表や教育分野の専門家や行政機関における専門家で構成された推進委員会や評価委員会の方々からいただいた貴重な意見や助言を、次年度の取組に速やかに反映することで、徐々に活動が洗練されていった。

このような積み重ねが、本学でしかできない教育システム（最大 3 か月の有給インターンシップや海外留学、Awesome Sasebo! Project）の確立につながった。

3. 5 年間の活動を通してみてきたこと

①社会（地域や海外）での学びは学修意欲を高める。

➡ギャップイヤーの経験の前後で学修意欲に大きな差があり、学修への動機づけに資することがわかった。

②2 年間という限られた年限の中で、食物科・保育学科の 4 学期制の導入は難しい。

➡養成施設としての制約が大きい両学科においては、国際コミュニケーション学科と同じような 4 学期制の導入は本事業期間中実現しなかった。しかし、教科により週 2 回授業を行うコースが増え、4 学期制導入への新たな展開につながった。

③地域活動を通じた学びは相当な工夫や労力が必要。

➡地域活動では、地域との関係性を作りそれを維持・発展させることに苦慮した。短大の思い（地域を盛り上げたい）と裏腹に、思いのほか地域の人々が困っていないと感じていたり、地域の方々の間にも温度差があったりと地域活動の運営には現在も苦心している。ただ、対話を重ねていくことの中にしか信頼関係は成り立たず、相手のニーズもしっかり受け止めてこそその地域活動であるので、今後も対話を続け、地域活動については常に新たな試みを追及していく。また、地域活動の意義をどう学生に理解し、納得させ、行動に結び付けるかについても試行錯誤を重ねた。本学教員の中に（地域活動の）専門家がいなくても本学教員なりに、地域活動の意義を学生に説明し実践を重ねていたが、当初は学生に伝わらないことが多く、学生から厳しい意見・評価をもらった。この点は、令和 2 年度より、地域活動を専門とする講師を学外から招き、理論をある程度学んでから実践につなげていくように改善することができた。

④本学の一番の良さ（特徴）は横のつながり（学科、コース・専攻）が得やすいということ。

5年間の活動を通して、他学科やコースがどのような地域活動を行うのかをお互い知ることにより、事業3年目あたりから学科を超えたコラボレーションが年々増えていった。

4. 成果と課題

(成果)

①多くの自信を得ることができた(学生だけでなく教員も)。

➡採択を機に、様々な機会でご本取組について発表を行い、多くのステークホルダーや大学・短期大学関係者から評価をいただく機会が増えた。よりよい取組になるための助言もいただいたが、その多くは本学の取組を高く評価するものであり、本学教職員そして学生が多くの自信を得ることができた。

②PDCAサイクルで事業を展開し、中期的な見通しをもって教育活動を行うことができるようになった。

➡従来の活動はともすれば単発で終わってしまったり、つながりの見えない活動で終わることもあった。本事業は5年間の活動をあらかじめ計画し取り組むものであり、それぞれの年度に数値目標を設置し、年々改善することでより洗練された活動になっていった。この経験は今後の本学の教育活動や事業計画にも活かしていける大きな学びとなった。

③学生の学びの姿勢が「受動的」から「能動的」へ。自ら考え、計画、実践できる力が身につくようになる。

➡入学直後のギャップイヤーを利用し、地域や海外で様々な視点に触れた学生たちは、その後の学びの姿勢が能動的になっていった。「何のために学ぶのか」という動機づけのヒントをギャップイヤーで得たといえる。もっと学びたい、もっと知りたい、もっとできるようになりたい、そう考えるようになった学生たちは、失敗がある意味許される「学生」の強みを活かし、様々なことにチャレンジするようになった。また語学の検定試験においては、ギャップイヤーを通して語学を修得する必要性を痛感し、これまで以上に語学力の向上のために上級の結果を目指し熱心に学ぶようになり、その結果、卒業後に海外の4年制大学に3年次編入する学生が格段に増えた。地域活動においては、学生たちが自分たちで考え、様々なアイデアを生み出し形にすることができるようになった。

(課題)

①学修成果の可視化については今後も研究が必要。

➡2年間という限られた時間の中で、本事業で学生たちが身につけた能力を可視化することには難しさを感じた。社会人基礎力テストなどを用いた測定も行ったが、やはり、定量化できない部分やまた卒業後に伸びていく力があるのではということが最後まで課題として残った。今後は、卒業生調査を行い、ギャップイヤーの活動内容と卒業後のキャリア形成との関連を明らかにすることが必要であると考えている。

②AP活動をどう継承し、発展させていくのか。

➡本事業は終了後も自立して継続させていくことが義務付けられている。本学も6年目から新たな段階に入る。ギャップイヤーでの長期学外学修プログラムについては、その大枠は継続し、新たな試みを行う。その基盤となるのは、「地域共生学科」としての再出発である。学科やコースなどの垣根を超えた地域活動は、各々の学科やコースでの学びだけではなく、プラスアルファの学修への意欲を増進させた。令和2年度からは、4つのコースからなる新学科と保育学科で本事業をさらに発展させる。

5. これから～「地域共生学科」として、新たなスタート～

本事業は補助期間を終えるが、本事業で得た学びや精神を引き継ぎ、今後グローバル化が一層進行する社会を生き抜くためにも、本学では日本人と留学生、そして地域住民との交流を通して真の意味で多様な背景をもった人と共生できるグローバル(グローバル+ローカル)人材を育成していく。

【必須指標の達成度】

	平成27年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
長期学外学修プログラムに参加する学生の割合	27%	90%	93%
長期学外学修プログラムを経た学生のGPA	2.84 _対	3.0 _対	2.7 _対
退学率	4.6%	3.0%	2.9%
学生の授業外学修時間(1週間あたり)	6時間	28時間	17時間
進路決定の割合	95.3%	100.0%	93.5%
学生が企画する活動数	12件	18件	30件